



TITLE:

京大広報 No. 657

AUTHOR(S):

京都大学総務部広報課

CITATION:

京都大学総務部広報課. 京大広報 No. 657. 京大広報 2010, 657: 3191-3218

ISSUE DATE:

2010-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196425>

RIGHT:



京大広報

No. 657

2010.6



川端達夫文部科学大臣による祝辞



松本 紘総長による式辞



iPS細胞研究所(CiRA)竣工式・開所式
—関連記事 本文3196ページ—

目次

産官学連携本部紹介一経過・実績・新体制・ 新しい取り組み— 副理事・産官学連携本部長 牧野 圭祐……	3192
〈大学の動き〉 名誉教授称号授与式を挙……	3195
〈部局の動き〉 生存圏研究所がインドネシア共和国タンジュンブラ大学 森林学部と部局間学術交流協定を締結……	3195
霊長類研究所がソウル大公園と学術交流協定を 締結……	3196
iPS細胞研究所(CiRA)竣工式・開所式を挙……	3196
法学研究科が清華大学法学院と学術交流協定を 締結……	3197
工学研究科・エネルギー科学研究科・エネルギー理工学 研究所がニューヨーク・シティ大学エネルギー研究所 と部局間学術交流協定を締結……	3198
医学部附属病院「積貞棟」竣工記念式典を挙……	3199
〈寸言〉 顧みすれば	井波 律子……3200
〈随想〉 共感すること	名誉教授 林 基治……3201

〈洛書〉 こころの研究から学んだこと 明和 政子……	3202
〈栄誉〉 今中忠行名誉教授、林 民生理学 research 科教授、 森 和俊理学 research 科教授が紫綬褒章を受章 ……	3203
〈資料〉 平成22年度入学試験諸統計……	3205
〈話題〉 FDのためのDVD教材「ティーチング・ティップス集」 を開発……	3210
堀江在マレーシア大使が霊長類研究所を視察……	3210
松本 紘総長が第4回中外界長会議に出席……	3211
中国・西安の京都大学同窓生と懇談会を開催……	3212
St. Gallen Symposium 参加報告……	3212
宇治キャンパスで平成22年度新入院生等のための 安全衛生教育を開催……	3213
吉田泉殿作庭完工祝いの会を挙……	3214
HEC Paris Executive MBAと「エグゼクティブ・ イノベーション・ダイアログ2010」を開催……	3214
松本 紘総長が東アジア研究型大学協会(AEARU) 第26回理事会に出席……	3215
〈グローバルCOEプログラム紹介〉 心が活きる教育のための国際的拠点……	3216

京都大学総務部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

産官学連携本部紹介—経過・実績・新体制・新しい取り組み—

副理事・産官学連携本部長 牧野 圭祐

なぜ産学連携なのか？

国立大学法人の果たすべき責務が教育および研究であることは周知のことですが、最近ではこれらに次ぐ第三の責務として「研究結果による社会貢献」が加わっています。この第三の責務は、大学における研究の結果を特許化することによって知的財産として権利化し、これを産業界にライセンス化して製品化したり、発明者等がベンチャー起業によって新しい産業を興し、雇用の創出や税収の安定化に貢献することを意味しています。欧米では、このような大学の事業を「サービス」といっており、大学の社会に対するサービスは当然のこととして受けとめられています。日本でもそのような考え方が定着しつつあります。

この「サービス」は、70-80年代、日本などの新興勢力の急速な発展で既存企業の業績不振にあえいでいた欧米、特に米国において誕生した概念であり、ジェネンテック等の大国際企業のかんりの数がこの時期に起業し、国際競争力の再強化と国内の新しい雇用の創生に大きな寄与をしてきたことはよく知られるところです。

我が国は、「科学技術立国」を標榜し、実践することによって国際社会における科学技術先進国としての確固たる地位を獲得しました。我々は、その恩恵によって今日の豊かな生活環境を得ているわけですが、昨今では発展途上国、とりわけアジア諸国の台頭は著しく、いわゆる産業構造に関するパラダイムシフトが起きつつあります。国際競争力の再生を目指した「イノベーション」創生の重要性が叫ばれる理由はそこにありますが、このためには、80年代に米国がそうしたように、常に新しいテーマの基礎研究に立ち向かう大学の科学技術力を活用することが極



めて重要になりました。しかし、今日の事情が当時と大きく異なるのは、さらに高度に発展を遂げた先進国家間の開発競争が激化を極めていることです。「ベンチャー起業」に加え、大型の産官学連携プロジェクト、さらに

は一国内で行うよりもより高い確率を持った国際的大プロジェクトへ移行することも考えられており、国際化の時代への突入が既に始まったと考えられます。産官学連携本部の役割は、一層重要になったと思います。

産官学連携本部の誕生

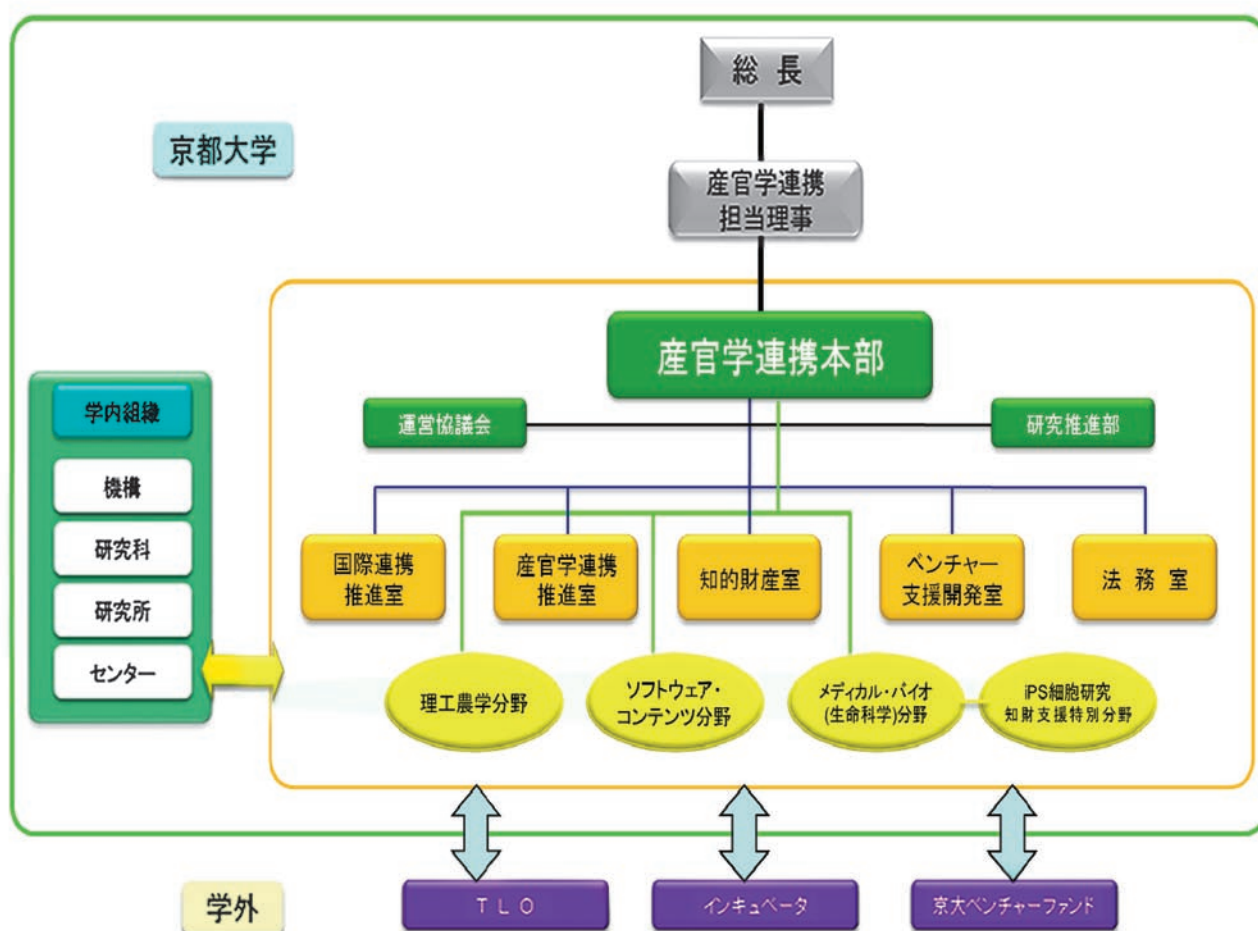
本学においては、2001年4月、「サービス」に取り組む組織として「国際融合創造センター」が設立されました。このとき定められた産官学連携ポリシーでは、「産官学連携研究を通してイノベーションの創出と社会貢献を積極的に推進する。」と謳われています。2003年4月、文部科学省の「大学知的財産本部整備事業」によって本学にも「知的財産企画室」が設立され、本格的な研究成果の実用化が始まりました。2004年4月の国立大学法人化によってその重要性は一層増しました。2005年4月には国際融合創造センターに加えて「国際イノベーション機構」が設立され、より一層全学あげての体制作りが始まりましたが、求められている事業を遂行するには十分とはいえませんでした。2007年7月、当時の研究・財務そして産学連携担当理事でありました現総長の松本 紘先生の指揮下で大きな構造改革が行われました。今日の産官学連携本部の前身ができたこととなります。この組織では、産官学連携事業の計画と運営を行う

「産官学連携本部」とそれを実行する「産官学連携センター」の二重の構造になっていましたが、本年4月にこの二つの組織を統合し、新しく「産官学連携本部」が発足しました。

現在、産官学連携本部は、塩田浩平産官学連携担当理事を介して総長の直接の指揮下にあり、ビジネス界と隣り合わせの産官学連携にとっての必須条件であるトップダウン体制が整いました。これは我が国でも最も斬新な体制であると思います。この下に本部長と副本部長を擁しており、研究推進部産官学連携課が事務機能で支えます。本部内には、事業の遂行に必要な知識と経験をもったメンバーを配しています(図を参照下さい)。

この実行部隊は、①産官学連携推進室、②知的財産室、③ベンチャー支援開発室、④国際連携推進室、①-④をサポートする⑤法務室で構成されます。①

では、共同研究の創出と関連する契約等を行います。最近では、この4月、大型共同研究の運用を目指して、産学が学内で共同研究を遂行するための「共同研究講座(部門)」を設立しました。また共同研究契約に擁する時間と労力をできるだけ少なくするために、一企業との契約上の共通項を予め決めておく「包括連携」も設定しました。②では、研究結果の特許出願・獲得に注力してきましたが、最近ではこの実用化を目指して特許のライセンス化に焦点をあてており、国内外でのショーケース等の開催を行っています。また広域TLOである関西TLOに一部業務委託を行い、発明評価に事前市場調査を導入し、ライセンスの可能性の高い研究を選択する方法をとっています。本学の年間特許申請件数は約200件で、特許等によって得られる本学の収入は約1億円に達しており、徐々に増加しています。③では、他大学と



同様に難問山積であり、臥薪嘗胆の最中ですが、産官学連携本部に属する寄附講座による「ビジネスプラン」等に多くの学生諸君が興味を持ち始めたことは、前向きの新しい傾向です。⑤では、組織内に法務関係者を配しているのと同時に学外の弁護士事務所等と提携を結び、国内外での法務事項対策に万全を期しています。さらには安全保障貿易管理に関しても貢献しているところです。

国際化への挑戦

2008年度から文部科学省の「産官学連携戦略展開事業」が始まり、産官学連携の国際化が重点課題になりました。本学の事業も採用されています。

上述したように産業界構造に関しては、パラダイムシフトの時代に突入しており、「イノベーション創生」によっていかにこの難局を乗り切るかが大きな課題です。昨年度開設された京都大学東京オフィスは、東京一極化に対して本学の存在を示すための積極的な対応の場であり、産官学連携の機会を拡大するためにも極めて重要です。しかし、基礎研究に依存した近年の開発研究の難しさを考えたとき、これだけでは本学の世界に冠たる優れた研究力をイノベーション創生のために最大限に生かすためには万全とはいえず、これと並行した国際学＝学連携を軸とした国際産官学連携(産学＝学産連携)による大きな規模の研究組織構築が重要になりつつあります。産官学連携本部は、この2年余の間に20回強の渡航を重ね、海外の大学、大学附置技術移転機関、サイエンスパーク、インキュベーション施設、政府系研究機関、知識・技術移転ブローカー、日本大使館等の我が国政府機関、特許事務所、京都大学海外同窓会等を訪問し、人的ネットワーク構築による国際産官学連携に必要な多岐に渡る情報の収集を行ってきました。その結果、現在では大学間国際協力のブリッ

ジができ、本学を中心に置いた産学＝学産連携プラットフォーム構築が実現されつつあります。大型の産学連携には、多くの大学研究者の参加が必要になりますし、既存の産学連携にエフォートの多くをとられている研究者も多いことから、国際学＝学連携によって得られる厚みがあり優秀な力量ある研究者層の増加は、他では得難い総合力として機能し、イノベーション創生の大きな力になると考えています。

今後のこと

昨年2月には、ロンドンに欧州拠点を開設しましたが、これによって国際産官学連携の動きに一層の拍車がかかり、連携大学と産学連携を行っている海外の企業の姿も見え始めています。国際産学連携プラットフォームの中心にある本学産官学連携本部を通して見ることでできる海外の大学・企業のポートフォリオは、国内企業を巻き込んだ新しい国際産官学連携研究を始めるにあたっては極めて重要な要因であり、今後もイノベーション創生のために国際産学＝学産連携プラットフォーム構築に注力していくつもりでいます。これらの一連の動きに並行して、海外の産業界への本学知財に関する情報発信の手段として、英文ホームページによる展示と海外におけるショーケースを開催しており、最近では海外の企業からの共同研究への興味が増しています。また、このような海外展開においては、若手メンバーの参画も積極的に行っており、さらには国際ワークショップに参加させることで、次世代を担う若手人材の育成にも励んでいるところです。

産官学連携本部・研究推進部産官学連携課は、このような活動を通して、本学の研究結果が我が国の科学技術立国の礎になるべく貢献する所存です。

大学の動き

名誉教授称号授与式を挙行

5月24日(月)、午前11時から総長応接室において塩田浩平理事・副学長、吉川研一理学研究科長、三輪哲二理学研究科教授の出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行され、松本 紘総長から神保道夫元教授(理学研究科)に京都大学名誉教授の称号が授与された。



松本総長(左)と神保元教授

(総務部)

部局の動き

生存圏研究所がインドネシア共和国タンジュンプラ大学森林学部と部局間学術交流協定を締結

生存圏研究所は、4月16日(金)にインドネシア共和国タンジュンプラ大学において、同大学森林学部と部局間学術交流協定締結の調印式を行った。

生存圏研究所からは、所用のため出席できなかった津田敏隆所長に替わり吉村 剛教授が出席し、タンジュンプラ大学からは、H. Chairil Effendy学長とH. Abdurrani Muin森林学部長を含む約20名が出席された。調印式の後、吉村教授より京都大学の概要および生存圏研究所の研究内容に関するセミナーが行われ、活発な質疑応答があった。

タンジュンプラ大学は、西カリマンタン州の州都、赤道直下の町ポンティアーナにある国立の総合大学で、9学部、約17,300人の学生を擁している。

生存圏研究所とタンジュンプラ大学森林学部との研究交流は、生存圏研究所の前身である木質科学研究所が拠点校となって実施した「木質科学分野における日本学術振興会拠点校方式による学術交流事業(1996年～2005年)」によって始まった。同事業による博士課程留学生の受入や、その後の両国研究資金による共同研究の実施など、実質的な研究交流が一

層進展したことから、今回の学術交流協定の締結に至った。なお、本交流協定の締結に当たっては、生存圏研究所で博士号を取得したYulianti Indrayani筆頭副学部長に多大な尽力をいただいた。

両機関は、今回の交流協定の調印により、さらに強い協力関係を築いていくことになり、今後、新たな共同研究やシンポジウムの実施、人物交流等を通して、学術研究の推進と教育活動の強化を図っていく予定である。



左から吉村教授、H.Chairil Effendy学長、
H.Abdurrani Muin 学部長

(生存圏研究所)

霊長類研究所がソウル大公園と学術交流協定を締結

霊長類研究所および野生動物研究センターは、4月28日(水)にソウル大公園(ソウル動物園)と学術交流協定の調印式を執り行った。

この学術交流協定は、霊長類を含む野生動物の生態・行動・認知発達についての「比較認知科学」に関する情報および技術の相互交換、並びに共同学術研究を基に、野生動物の教育的展示をより一層発展・促進することを目的としている。

ソウル大公園は、ソウル市郊外の果川市にある敷地面積10万坪に及ぶ総合公園で、動物園の他、植物園、国立現代美術館、ソウルランド(テーマパーク)で構成されている。

今回、ソウル動物園にて行われた調印式では、松沢哲郎霊長類研究所長と李元孝ソウル大公園長が覚書を取り交わした後、松沢所長による記念講演会が開催された。講演会には、獣医、動物園飼育関係を目指す学生や霊長類学を志す学生等、多数の来聴者

があった。

今回の交流協定締結をきっかけに共同研究や研究者・大学院生の交流が活発化し、両機関のさらなる発展につながることを期待される。

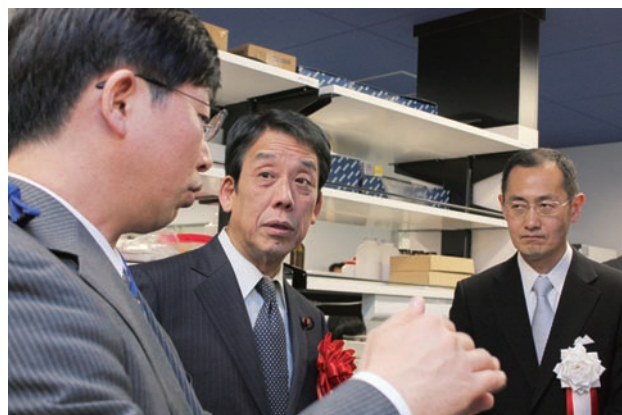


調印式での松沢所長(右)と李公園長

(霊長類研究所)

iPS細胞研究所(CiRA)竣工式・開所式を挙行

iPS細胞研究所(CiRA)は、5月8日(土)に竣工式・開所式を挙行了。川端達夫文部科学大臣をはじめとする文部科学省、経済産業省、厚生労働省、内閣府等の政府関係者、山田啓二京都府知事、門川



オープンラボで説明を聞く川端大臣と山中所長

大作京都市長、学内外の研究者、国会議員、患者団体代表者、寄附者、マスコミなど招待者約350名が参加された。竣工式とお披露目会は研究棟で行われ、開所記念式および記念祝賀会は、百周年時計台記念館に場所を移して開催された。

竣工式では、坂田東一文部科学事務次官らによるテープカットが行われた。その後、招待者は、本年2月に完成した研究棟を見学し、CiRA研究者などによるiPS細胞研究や施設についての説明に熱心に耳を傾けられていた。研究棟は地下1階、地上5階建て、延べ床面積は12,000平方メートル。動物実験施設、細胞調製施設(FiT: Facility for iPS Cell Therapy)が設置されている。なお、1階のギャラリーとエントランスホールは、平日の午前8時30分から午後5

時15分まで、一般公開されている。

開所記念式典の挨拶では、川端大臣を含む来賓の方々からCiRAへの期待が述べられた。松本 紘総長は、式辞の中で、治療法が開発されていない病気の原因解明、創薬、治療法の開発に役立つiPS細胞の技術を一日も早く実用化するために、京都大学は引き続きiPS細胞研究に対して、最大限の支援を行うと述べられた。また、CiRAの初代所長である山中伸弥教授(物質-細胞統合システム拠点教授兼務)は、研究棟建設や研究所設立のために支援いただいた関係者への感謝を繰り返し述べるとともに、今後10年の目標として、基盤技術の確立・知財確保、再生医療用iPS細胞バンク構築、前臨床、臨床試験、患者由来iPS細胞による治療薬開発を挙げ、iPS細胞技術



開所記念式典で研究所概要を説明する山中所長

の応用実現への決意を述べた。

引き続き行われた祝賀会では、招待者とCiRA教職員らが和やかに交流をはかり、研究所の船出を祝った。



左から中辻iCeMS拠点長、光山医学研究科長、藤井理事、山中CiRA所長、坂田文部科学事務次官、松本総長、江崎理事、吉川理事、中村医学部附属病院長

(iPS細胞研究所)

法学研究科が清華大学法学院と学術交流協定を締結

5月14日(金)、法学研究科において、林 信夫法学研究科長と王 振民清華大学法学院長により、学術交流に関する一般的覚書の調印式が行われた。

清華大学法学院は、中華人民共和国の代表的な法学研究機関の一つであり、創設は1929年に遡る。中華人民共和国建国後に一時の休止期間が挟まれるが、改革開放政策実施後は、中国の法制現代化を担う中

心的な研究教育機関として飛躍的な拡大を遂げ、現在、教育面では本科の他にロースクールを擁し、研究面でも商法研究中心、民事法研究中心をはじめ16の研究中心が組織され、2007年に創刊された『清華法学』を舞台として活発な研究活動を行っている。

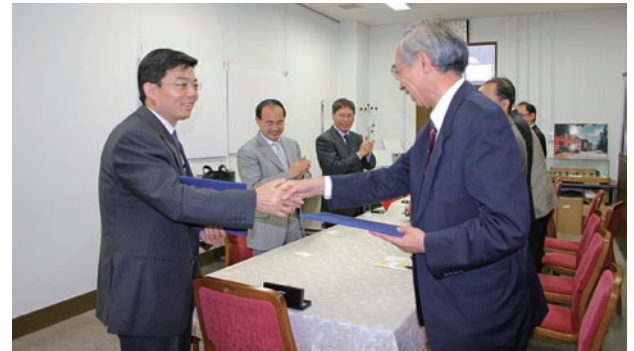
同法学院には、かつて本学の法学研究科に留学し、博士号を取得した教授もあり、これまでも相互

に教員が訪問し、講演をする等の学術交流活動を行ってきたが、今回はそうした人的交流に制度的基盤を与えるために、交流協定の締結に至ったものである。

今回の協定締結により、個別科目毎の研究上の交流が今まで以上にスムーズに進められるほか、同じ法曹養成を担う中核的な教育機関として抱える共通の問題について、部局レベルで情報交換をしあう等の新たな交流関係が作られて行くことが期待される。

なお、法学研究科が単独で外国の機関と締結した部局間学術交流協定は、平成20年度のマックス・プランク外国私法および国際私法研究所をはじめとす

る4件および平成21年度の1件に続いて今回で6件目となった。



協定書を交換し、握手を交わす
林法学研究科長(右)と王清華大学法学院長

(大学院法学研究科)

工学研究科・エネルギー科学研究科・エネルギー理工学研究所がニューヨーク・シティ大学エネルギー研究所と部局間学術交流協定を締結

5月18日(火)に工学研究科、エネルギー科学研究科、エネルギー理工学研究所とニューヨーク・シティ大学エネルギー研究所は、部局間学術交流協定を締結した。京都市内のホテルにて開催された調印式には、本学から小森 悟工学研究科長、宅田裕彦エネルギー科学研究科長、尾形幸生エネルギー理工学研究所長、本協定コーディネーターの功刀資彰工学研究科教授およびSanjoy Banerjee ニューヨーク・シティ大学エネルギー研究所長が参加された。

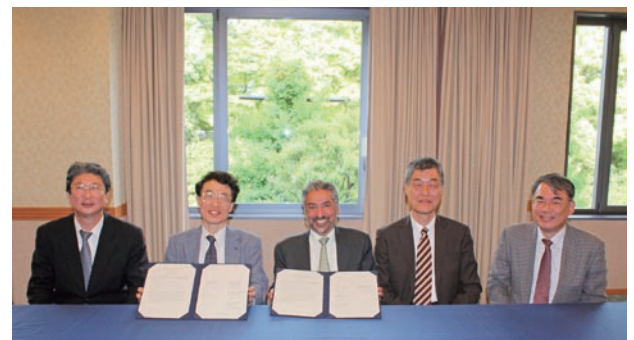


調印する小森工学研究科長(左)とBanerjee所長

本協定は、エネルギー科学研究科のグローバルCOEプログラム「地球温暖化時代のエネルギー科学拠点」(拠点リーダー：八尾 健エネルギー科学研究科教授)での共同研究で芽生えた学術交流の結果、

締結するに至ったものである。

ニューヨーク・シティ大学は、ノーベル賞受賞者を含む数多くの卓越した卒業生を輩出してきており、現在も活発な研究活動が行われている。本協定の調印により、これらの機関はより濃密な協力関係を構築し、共同研究等を通じて学術面での協力関係の強化を図っていくこととしている。



左から宅田エネルギー科学研究科長、小森工学研究科長、Banerjee所長、尾形エネルギー理工学研究所長、功刀教授

(大学院工学研究科)

医学部附属病院「積貞棟」竣工記念式典を挙げる

医学部附属病院では、がん治療の拠点となる新病棟「積貞棟(せきていとう)」の完成を記念して、5月18日(火)に竣工記念式典を開催した。学内外から約170名が出席し、盛大に新病棟「積貞棟」のオープンを祝った。

今回完成した「積貞棟」は、任天堂株式会社相談役の山内 溥氏より、築後30年以上が経過した病棟を抱える本院の現状に対し、「京大病院にふさわしい病棟を建ててほしい」との意向から寄附をいただき建設された。

記念式典は、山内相談役をはじめ玉上 晃文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室長、山田啓二京都府知事、門川大作京都市長、松本 紘総長、光山正雄医学研究科長、中村孝志医学部附属病院長によるテープカットで始まり、その後、施設見学が行われた。参加者は、8階の特別病室、国立大学病院で初めてとなる急速冷却・加熱で病院食の衛生管理を徹底する「クックチルシステム」、外来化学療法ゾーンやがん情報コーナーなどを熱心に見学された。

引き続き、百周年時計台記念館に会場を移し、竣工記念式典が挙行された。始めに中村病院長から、寄附をいただいた山内相談役への感謝の言葉とともに、「新棟をがん治療の拠点



中村病院長による式辞

としてがん克服を目指した新しい治療法の実践の場とし、がん治療に関わる医師・コメディカルの人材育成を目指す」との式辞があり、次に松本総長が「社会貢献、研究、教育に係る



松本総長による挨拶

る病院の役割は大きい。新しいがんとの戦い、治療に向けて頑張ってもらいたい」と挨拶された。続いて、新木一弘文部科学省高等教育局医学教育課長(玉上大学病院支援室長代読)、山田知事(浅田良純京都府健康福祉部長代読)、門川市長、森 洋一京都府医師会会長から、期待を込めた祝辞をいただいた。

その後行われた記念講演会では、京都大学OBでキャスターの鳥越俊太郎氏が「がんと向き合って」と題し、自身の体験談を交えた講演を約400名の聴衆のなか行われた。



記念講演を行う鳥越氏

また、記念講演会後に祝賀会が開催され、出席者らは、今後の医療発展や新棟が担う地域医療について語り合った。



左から光山医学研究科長、中村病院長、松本総長、山内任天堂株式会社相談役、玉上文部科学省大学病院支援室長、山田京都府知事、門川京都市長



積貞棟外観

(医学部附属病院)

寸言

顧みすれば

井波 律子

私が京都大学文学部に入学したのは、一九六二(昭和三十一年)四月である。

現在はどうかわからないが、当時の文学部は一学年二百名であり、教養部二年の間は、選択する二つの外国語の組み合わせにより、四クラスに配属されることになっていた。私は第一外国語にフランス語を選んだため、文学部四組すなわちL4に属することになった。まだ女子学生の少ない時代だったが、L4は半分近くを女子学生が占めており、その意味では高校時代と雰囲気はほとんど変わらなかった。おまけに、私は京都の公立高校(紫野高校)出身で、大学入学後も自宅通学であり、変わったことといえば、中学、高校の六年間、自転車通学だったのが、バス・電車通学になったことぐらいだった。

というふうに、当初はこれという新たな心がまもなく大学生になったけれども、いざ大学生活が始まると、大変化の連続だった。まず驚いたのは授業時間である。当時、教養部の授業は一コマ二〇分(二時間)で、午前中に二コマ、午後に二コマの配分になっており、休み時間はなかった。はじめてこの時間割を見たとき、考えただけで頭が痛くなったが、実際の授業は時に短く時に長く、担当の先生の自由裁量で進められた。近頃、ゆとり教育は評判がよくないようだが、若い学生を一人前の大人と見なしつつ、ゆったり時間割を組んでおこなわれた、この教養部の授業スタイルはすばらしいものだったと思う。

教養部L4の同級生もまことに刺激的だった。尋常ならざる読書家が多く、最初のうちは、彼らの間で飛びかう書名もわからず、これではならじと猛然と本を読みだした。翻訳ばかりだが、フランスのモロロの詩、小説、評論はいわずもがな、当時は実存主義の時代だったこともあって、サルトルにはじまり、ベルクソンやらデカルトやら、キルケゴール



やらニーチェやら、手当たりしだいに哲学の本も読んだ。今から考えてみると、どれほど理解できていたのか、はなはだ心もとないけれども、ともあれ二年間の教養部時代は濫読に明け暮れた季節であった。あんなに大量の本を読んだのは、後にも先にもこの時期だけである。その後何十年もたってから、L4の同窓会が開かれるようになり(今も続いている)、私だけでなく、誰もが自分の無知を恥じて読書に励んだことが判明したものの、あの必死の読書体験から、どれほど多くを得たか、はかりしれないものがある。

ゆったり授業と濫読の教養部時代が終わり、学部に進んだ後、またまたすべてが一変した。私の専攻した中国文学科の主任教授は当時、吉川幸次郎先生だった。濫読の成果か、速読は得意だったが、はじめて本格的に接した漢籍は難解しごくであり、いくら時間をかけてもなかなか歯がたたなかった。しかし、吉川先生の授業を受け、その精緻な本の読み方を目の当たりにするうち、精読のなんたるかがおぼろげにわかるような気がしてきた。だからといって、むろん急に漢籍が読めるようになったわけではないが、粘り強く徹底的に文章を読みとろうとする姿勢だけは、身にしみて理解できた。

以来、学部二年を終えた後も、大学院の修士課程・博士課程、研修員、助手と、あわせて十二年間、中国文学をやりつづけた。教養部の二年を含めれば、なんと十四年もの間、京大に在籍していたことになる。

一九七六年から、私は金沢大学教養部に移り、中国語を教えるようになった。十九年後の一九九五年、国際日本文化研究センターに転勤して京都にもどり、昨年、定年をむかえた。顧みすれば、長の道のりであったが、この間、教養部の自由な雰囲気の中かで体得した濫読・速読の方法と、学部・大学院で習いおぼえた精読の方法を併用しながら、本を読み、ものを書いてきた。まさに習い性となる、というべきであろう。

(いなみ りつこ 中国文学者・国際日本文化研究センター名誉教授 昭和41年文学部卒業)

随想

共感すること

名誉教授 林 基治



近頃起きた無差別殺人事件や幼児虐待の報道などに接すると、現代人の精神がなんだかとても不健全な方向に向かっているのではないかと心配になります。他人が喜んだり悲しんだりしているのを見

た時に、自分も同じように感じることを「共感(empathy)」と言います。2004年に英国の研究者が、痛みを感じている他者を見ている時、脳では「帯状回」と「島」と呼ばれる領域が盛んに活動しているということを発見しました。その後の研究により、ここが「共感」に関与する最も重要な脳領域だと考えられています。また、この脳領域には「大型錐型細胞(spindle cell)」という糸巻状の特殊な細胞が存在することが知られています。この細胞はヒト以外には、チンパンジー、ゴリラ等の大型類人猿にしかないと言われていましたが、最近クジラ、イルカ、ゾウにも発見されました。私も死産のチンパンジーの脳を調べ、この細胞を見つけました。この時期にすでにあるということは、この細胞の存在が遺伝的に決定されている可能性を示唆しています。また、この細胞を持つ哺乳動物は、いわゆる社会性が発達し、共通した能力のひとつが「共感する」ということであると言われています。ただし、この細胞が「共感する」時、実際何か役割を果たしているかどうかはまだ実験的に証明されていませんし、このような心の機能は複雑でそう簡単には解明できないことも事実です。

さて、一般的にヒトは、お互いのコミュニケーションに言語を用いますが、異なる言語圏のヒトどうしでは、ことば以外の、表情、身振りなどによって何とか意思の疎通を図ることになります。相手の表情やしぐさをよく観察し、そこからさらにそのヒトの

喜びや悲しみ等の心の動きを推測して「共感する」というのは、かなり高度な能力のなせるわざのように思われます。しかし、ここで子供時代を振り返ってみると、仲良しの友達が悲しんでいるのを見て自分も泣いてしまうというようなことは、ごく当たり前のことだったような気がします。最近コンピューターや携帯電話が普及し、子供時代からすでに生身のヒトとヒトが顔を突き合わせて接し、「共感する」機会が少なくなってしまうのではないのでしょうか。私は終戦直後に旧満州で生まれ、命からがら東京に引き揚げてきました。私の記憶にある東京は戦災で多くの家が消失し、がらんとした焼け野原があちこちに広がっていました。それは実はとても悲惨な光景だったのですが、子供にとっては格好の遊び場で、大勢の子供たちと夜遅くまで遊びほうけたものです。そのころはほとんどの家庭が戦後の荒廃の中で同じように貧しく忙しく、子供たちは年齢の差もあまり気にせず群れ合うようにして喜怒哀楽に満ちた環境の中で過ごし、ごく自然に健全な「共感」する能力も育んでいったのでしょうか。

現役時代には、「霊長類の脳の発達と老化」を分子的側面から研究してきました。ソマトスタチンなどの神経伝達物質、NGFやBDNFなどの神経栄養因子類等を研究対象に36年間ミクロの世界に没入してきました。京大霊長類研究所でこそ実現できた自由な研究の旅でした。道中巡り会った若者たちは、それぞれ独自の道を力強く歩き始めています。定年を機にようやく現実世界に戻ってきた私は今、最新の論文ばかりでなく、目の前の生身の友人達との交流に触発され、かつての旅の途上での発見や課題が、以前は想いもしなかった様相で見える時があり、今度は空想(妄想?)の世界をさまよっています。

(はやし もとはる 平成21年退職 元霊長類研究所教授、専門は神経科学)

洛書

こころの研究から学んだこと

明和 政子

「ヒトらしいこころのはたらきや仕組みはいつ、どのように、そしてなぜそのように成立するのか」。この答えを知りたくて、私は研究者の道を歩み始めました。研究のキーワードは、「こころの発達と進化」となるでしょうか。



こころのはたらきという捉えどころのない研究対象は、想像以上にやっかいなものでした。しかし、20年に満たないながらもこれまでの自分なりの歩みを振り返ってみると、それなりの手ごたえも感じ始めています。継続は力なり、です。

私は教育学部出身ですが、大学院に入学してからは霊長類研究所にて研究の機会を与えていただきました。ヒトのこころの進化史的基盤を探ろうとする、最初のチャレンジでした。ヒトととても似ていて、同時にかなり異なる部分も持ち合わせている存在、チンパンジーをはじめとするヒト以外の霊長類のこころを知りました。ヒト用物差しでしかこころを捉えようとしていなかったこと、こころの多様性にも気づきました。

続いて取り組み始めたのは、ヒトのこころの個体発生的起源を追究する試みでした。この時期、新たなチャレンジを後押ししてくれたのは、私の個人的な体験、出産と子育て、子育てでした。新たな生命が、自分の身体から生み出される。にもかかわらず、それらは別個のこころをもつ存在へと変化していく、この強烈な体感、純粋な驚きと感動です。超音波画像診断装置を用いた胎児の行動記録や、早産児の脳機能計測(京都大学医学部附属病院NICUの先生方との共同研究)など、赤ちゃんのこころのはたらき、特徴を、行動・生理学的に解明しようとしてきました。こころの成立を発達の軸から捉える研究も、いばらの道でした。10名の赤ちゃんに実験に協力いただいても、分析に耐えうるデータが得られるのは3、4名ほどでしょうか。それでも、冒頭の問いへの探究

心を消すことなく歩み続けてこられたのは、「新たな知を求めたい」という、ただただ純粋な研究者としての動機、そして、それを京大スケールで包容してくれた恩師、同僚、学生たちに支えられてきたからだと思います。今、私たちの研究グループは、少しずつですが、こころの発達、進化についての新たな知を手中に収めようとしています(ご関心のある方は、私たちの研究グループの活動報告、HP等をご覧ください)。

そして今、京大入学後20年の時を経て、私はまた新たなチャレンジを意識し始めています。「こころの発達を探る研究は、誰のため、そして何のためにあるのか」。この問いに自分なりの答えを見出し、責任を果たすチャレンジです。こちらの問いは、科学的、実証的に答えが導き出せる性質のものではありませんし、個人の価値観、研究テーマなどによりさまざまです。しかし、これまでの歩みで得た手ごたえを自信に変える勇気をそろそろ持つことで、私は次の2点と向き合っていきたいと思っています。①ヒトのこころの誕生と発達のプロセスを科学的に解き明かすことで、ヒトがこころを育むために必要な環境を、根拠あるかたちで社会に示したい(現在、子どものこころを育む環境が危機的な状況にあることは多くの評論家らが指摘しているが、その大半は根拠のないコメントに終始している)。②この分野の面白さ、重要性を次世代に伝え、10年、20年、さらに先の研究の進展を担ってくれる人材を養う土壌づくりに係わりたい。それは、ヒトという種が長い時間をかけて蓄積してきた文化を、次世代に継承する営みに他なりません。

私の研究分野は恵まれています。雨の日でもベビーカーを押して、赤ちゃんを研究室まで連れて来てくださる親御さんの思い、そして赤ちゃんの温もりや匂いがいつもそばにあります。社会とのつながりを感じながら、研究ができる。こうした体感こそが、こころの知を追い求める研究者の動機を支え続けてくれています。

(みょうわ まさこ 教育学研究科准教授、専門は比較認知発達科学)

栄誉

今中忠行名誉教授、林 民生理学研究科教授、森 和俊理学研究科教授が紫綬褒章を受章

このたび、わが国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、今中忠行名誉教授、林 民生理学研究科教授、森 和俊理学研究科教授が4月29日(木)に紫綬褒章を受章されました。以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

今中忠行名誉教授は、昭和42年大阪大学工学部醗酵工学科を卒業、同44年同大学大学院工学研究科修士課程を修了し、博士課程に進学、同年末に博士課程を中途退学し、同45年1月に大阪大学工学部醗酵工学科助手に採用され、同48年に工学博士の学位を授与された。昭和56年大阪大学工学部助教授、平成元年同大学工学部教授を経て、同8年京都大学大学院工学研究科教授に就任された。平成20年に定年退職し、京都大学名誉教授の称号を授与された。本学退職後は立命館大学教授となり、今日に至っている。



同名誉教授は、永きにわたり生物工学・生物化学分野の研究と教育に努め、特に微生物のもつ多種多様な機能の同定とそれらのメカニズムの解明、さらにはそれらを利用した技術開発に力を入れてこられた。その研究成果から多くの新しい概念が生まれ、我が国の微生物学・酵素学・プロセス工学の発展に大きく貢献している。

同名誉教授は、タンパク質工学分野において、タンパク質内部の疎水相互作用を増強させることにより、タンパク質の耐熱化が可能であることを世界で

初めて実証し、タンパク質の安定化に対する新しい原理を示された。また、超好熱始原菌*Thermococcus kodakaraensis* KOD1株を分離・解析し、本菌由来の多数の耐熱性酵素について機能解析を進めてこられた。特にKOD1株由来耐熱性DNA polymeraseが優れた酵素特性を示すことを明らかにし、PCR (Polymerase Chain Reaction) 法への実用化を成し遂げた。また、同KOD1株を対象に全ゲノム塩基配列を決定するとともに、初めての超好熱菌遺伝子操作系を確立し、超好熱菌における遺伝学分野の開拓に中心的な役割を果たされた。さらに様々な深部地下環境、油田、海洋熱水環境や南極地域から多様な微生物を分離・同定したうえで、それらから多数の新規酵素・代謝経路を発見し、微生物の生態学、代謝生理学に大きく貢献された。

これら一連の研究業績に対し、日本醗酵工学会斉藤賞、日本生物工学会生物工学賞、バイオインダストリー協会賞、日本化学会賞、環境バイオテクノロジー学会賞他が授与された。また、日本化学会フェロー、アメリカ微生物学アカデミーフェローに推挙されるとともに、日本学術会議会員を務められている。

(大学院工学研究科)

林 民生教授は、昭和45年京都大学工学部を卒業後、同50年同大学大学院工学研究科博士課程を修了し、工学博士の学位を授与された。昭和50年京都大学工学部助手に採用され、平成元年まで同職を務めた。この間、昭和51年から1年間コロラド州立大学化学科に



において博士研究員を務めた。その後、平成元年北海道大学触媒研究所教授に就任、同年同大学触媒化学研究センターに配置換、同6年京都大学理学部教授、同7年理学研究科教授となり、今日に至っている。

この間、同教授は、永年にわたって化学の研究と教育に顕著な功績を収められた。研究においては、遷移金属錯体触媒を駆使して数々の新しい高選択的有機合成反応を実現されてきた。特に不斉炭素－炭

素結合形成反応やオレフィンの不斉官能基化反応では、従来例を見ない全く新しい形式の触媒的不斉合成反応を多数開発された。同教授が世界に先駆けて発表した新しい触媒反応の開発とそれらの高効率・高立体選択的な不斉化研究成果が、世界中の研究者に与えた影響は計り知れない。学問的な価値だけでなく、実用性にもすぐれ、同教授が開発した触媒的不斉合成によって効率よく得られる光学活性化合物は、医薬品など様々な有用物質の合成中間体として実際に用いられている。このような研究を通して大学院生や若手研究者の教育に力を注ぎ、次世代研究者の育成にも多大なる貢献をされた。

これらの業績に対して、第5回日本IBM科学賞、第55回日本化学会賞、Thomson Scientific Research Front Award 2004、2008年有機合成化学協会高砂香料国際賞(野依賞)、2008年Author C. Cope Scholar Award (米国化学会)が授与された。同教授

森 和俊教授は、昭和56年京都大学薬学部を卒業、同58年同大学大学院薬学研究科修士課程を修了、同60年同大学院博士後期課程を中途退学し、同年岐阜薬科大学助手に採用された。昭和62年京都大学薬学博士の学位を授与された。その後、平成元年米国テキサス大学博士研究員、同5年株式会社エイチ・エス・ピー研究所副主任研究員、同8年同研究所主任研究員を経て、同11年京都大学大学院生命科学研究科助教授、同15年同大学大学院理学研究科教授となり、今日に至っている。

同教授は、分子生物学の研究、教育に努め、分子生物学の発展に貢献されてきた。特に、小胞体と呼ばれる細胞内小器官(膜で囲まれた細胞内構造物)に立体構造が異常になったタンパク質が蓄積していることを感知するセンサー分子IRE1を酵母を用いて



の研究成果は、300報を超える原著論文として英文専門誌に発表され、これらの論文の被引用数は2万回以上に及ぶ。論文数と被引用数を元に考案された、科学者の科学的貢献度を示すh指数(h-index)と呼ばれる指標は、80となり極めて大きな数値である。こうした研究活動の他、Tetrahedron Asymmetry誌のアジア地区編集長や数多くの専門誌の編集顧問を務め、学会の発展にも多大の貢献をされた。

以上のように、同教授は、遷移金属錯体触媒を駆使して数々の新しい高選択的有機合成反応を実現してきたが、これらの成果は極めて斬新な発想と力量ある展開力によって成し遂げられたものである。同教授の研究は有機合成化学から無機化学、触媒化学などにまでわたる広範な分野の世界中の数多くの研究者に多大な影響を及ぼした。今回の紫綬褒章受章は、その功績が高く評価されたことによる。

(大学院理学研究科)

世界で初めて発見し、小胞体ストレス応答という新たな研究領域を開拓された。その後、哺乳動物小胞体ストレス応答の分子機構を解析し、高等動物では、小胞体内に立体構造の異常なタンパク質が蓄積することに対して、より巧妙で多重な備えが用意されていることを明らかにされた。同教授が哺乳動物小胞体ストレス応答の基本的枠組みを提示したことは、領域外の研究者の関心をも呼び起こし、現在、種々の病気との関連が次々と明らかになっており、小胞体ストレス応答が極めて重要で大きな研究分野であると広く認識されている。

これらの一連の業績が高く評価され、平成9年に日本生化学会奨励賞、同17年第4回ワイリー賞(米国)、同18年日本生化学会第1回柿内三郎記念賞、同20年第26回大阪科学賞、同21年カナダガードナー国際賞を受賞されている。これらに続いての今回の紫綬褒章受章は、まことに喜ばしいことである。

(大学院理学研究科)

資料

平成22年度入学試験諸統計

1. 募集人員・志願者数・合格者数・入学者数等調

学部・日程		募集人数	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入学者 辞退者数	追加 合格者数	入学者数
総合人間 学 部	前期(文系)	65 ^人	340 ^人	266 ^人	265 ^人	67 ^人	^人		123 ^人
	前期(理系)	55	239	220	218	56			
文 学 部	前 期	220	738	738	722	227			227
教育学部	前期(文系)	50	191	191	187	52			62
	前期(理系)	10	41	41	40	10			
法 学 部	前 期	320	876	876	857	330			330
経済学部	前期(一般)	180	575	575	567	190			241
	前期(論文)	25	117	88	87	25			
	前期(理系)	25	110	110	105	26			
理 学 部	前 期	311	892	871	867	319	3		316
医 学 部	前 期	250	605	584	572	264	5		259
薬 学 部	前 期	80	213	213	209	83			83
工 学 部	前 期	955	2,507	2,506	2,475	975	1		974
農 学 部	前 期	300	876	876	871	316			316
合 計		2,846	8,320	8,155	8,042	2,940	9		2,931

〔外国学校出身者のための選考の実施結果（外数）〕

学 部	募集人数	志願者数	第1次選考合格者数	受験者数	合格者数	入学者数
法 学 部	10人以内	29 ^人	19 ^人	10 ^人	6 ^人	6 ^人
経済学部	10人以内	28	15	11	7	7

〈医学部・薬学部学科・専攻別内訳〉

学部・日程		募集人数	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入学 辞退者数	追加 合格者数	入学者数
医学部	前期	250 ^人	605 ^人	584 ^人	572 ^人	264 ^人	5 ^人		259 ^人
医学科	前期	107	303	282	279	109			109
人間健康科学科	前期	143	302	302	293	155	5		150
看護学専攻	前期	70	143	143	139	75	4		71
検査技術科学専攻	前期	37	81	81	78	39			39
理学療法学専攻	前期	18	37	37	35	20	1		19
作業療法学専攻	前期	18	41	41	41	21			21
薬学部	前期	80	213	213	209	83			83
薬科学科	前期	50	124	124	121	53			53
薬学科	前期	30	89	89	88	30			30

〈工学部・農学部学科別内訳〉

学部・日程		募集人数	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入学 辞退者数	追加 合格者数	入学者数
工学部	前期	955 ^人	2,507 ^人	2,506 ^人	2,475 ^人	975 ^人	1 ^人		974 ^人
地球工学科	前期	185	485	485	480	190			190
建築学科	前期	80	229	228	226	82			82
物理工学科	前期	235	572	572	561	238			238
電気電子工学科	前期	130	381	381	376	133	1		132
情報学科	前期	90	221	221	219	92			92
工業化学科	前期	235	619	619	613	240			240
農学部	前期	300	876	876	871	316			316
資源生物科学科	前期	94	——	——	——	97			97
応用生命科学科	前期	47	——	——	——	49			49
地域環境工学科	前期	37	——	——	——	40			40
食料・環境経済学科	前期	32	——	——	——	34			34
森林科学科	前期	57	——	——	——	60			60
食品生物科学科	前期	33	——	——	——	36			36

2. 合格者 最高点・最低点（総点）調

学 部	日 程		満 点	総 点																																																			
				最 高 点	最 低 点	平 均 点																																																	
総 合 人 間 学 部	前 期	(文 系)	750 点	572.00 点	475.00 点	497.04 点																																																	
		(理 系)	800	556.75	401.00	449.42																																																	
文 学 部	前 期		750	584.53	488.45	515.86																																																	
教 育 学 部	前 期	(文 系)	900	682.01	583.06	612.13																																																	
		(理 系)	900	658.78	591.66	608.23																																																	
法 学 部	前 期		750	606.85	492.40	523.50																																																	
経 済 学 部	前 期	(一 般)	800	621.30	526.40	555.24																																																	
		(論 文)	600	391.66	334.66	354.82																																																	
		(理 系)	950	714.00	584.60	640.22																																																	
理 学 部	前 期	注 1	650	535.00	361.00	403.51																																																	
		(数理 30 位)注 2	(400)	(358.00)	(296.00)	——																																																	
医 学 部	前 期		——	——	——	——																																																	
<table><tr><th rowspan="2">医学部学科別</th><th rowspan="2">日 程</th><th rowspan="2">満 点</th><th colspan="3">総 点</th></tr><tr><th>最 高 点</th><th>最 低 点</th><th>平 均 点</th></tr><tr><td>医 学 科</td><td rowspan="5">前 期</td><td>1,300 点</td><td>1,080.98 点</td><td>900.86 点</td><td>964.01 点</td></tr><tr><td>人間健康科学科看護学専攻</td><td>1,200</td><td>867.86</td><td>648.16</td><td>711.02</td></tr><tr><td>人間健康科学科検査技術科学専攻</td><td>1,200</td><td>891.06</td><td>723.03</td><td>776.81</td></tr><tr><td>人間健康科学科理学療法学専攻</td><td>1,200</td><td>867.76</td><td>751.43</td><td>795.75</td></tr><tr><td>人間健康科学科作業療法学専攻</td><td>1,200</td><td>870.33</td><td>687.60</td><td>731.95</td></tr></table>							医学部学科別	日 程	満 点	総 点			最 高 点	最 低 点	平 均 点	医 学 科	前 期	1,300 点	1,080.98 点	900.86 点	964.01 点	人間健康科学科看護学専攻	1,200	867.86	648.16	711.02	人間健康科学科検査技術科学専攻	1,200	891.06	723.03	776.81	人間健康科学科理学療法学専攻	1,200	867.76	751.43	795.75	人間健康科学科作業療法学専攻	1,200	870.33	687.60	731.95														
医学部学科別	日 程	満 点	総 点																																																				
			最 高 点	最 低 点	平 均 点																																																		
医 学 科	前 期	1,300 点	1,080.98 点	900.86 点	964.01 点																																																		
人間健康科学科看護学専攻		1,200	867.86	648.16	711.02																																																		
人間健康科学科検査技術科学専攻		1,200	891.06	723.03	776.81																																																		
人間健康科学科理学療法学専攻		1,200	867.76	751.43	795.75																																																		
人間健康科学科作業療法学専攻		1,200	870.33	687.60	731.95																																																		
薬 学 部	前 期		950	737.85	560.11	619.92																																																	
<table><tr><th rowspan="2">薬学部学科別</th><th rowspan="2">日 程</th><th rowspan="2">満 点</th><th colspan="3">総 点</th></tr><tr><th>最 高 点</th><th>最 低 点</th><th>平 均 点</th></tr><tr><td>薬 科 学 科</td><td rowspan="2">前 期</td><td>950 点</td><td>737.85 点</td><td>574.28 点</td><td>626.80 点</td></tr><tr><td>薬 学 科</td><td>950</td><td>686.90</td><td>560.11</td><td>607.76</td></tr></table>							薬学部学科別	日 程	満 点	総 点			最 高 点	最 低 点	平 均 点	薬 科 学 科	前 期	950 点	737.85 点	574.28 点	626.80 点	薬 学 科	950	686.90	560.11	607.76																													
薬学部学科別	日 程	満 点	総 点																																																				
			最 高 点	最 低 点	平 均 点																																																		
薬 科 学 科	前 期	950 点	737.85 点	574.28 点	626.80 点																																																		
薬 学 科		950	686.90	560.11	607.76																																																		
工 学 部	前 期		——	——	——	——																																																	
<table><tr><th rowspan="2">工学部学科別</th><th rowspan="2">日 程</th><th rowspan="2">満 点</th><th colspan="3">総 点</th></tr><tr><th>最 高 点</th><th>最 低 点</th><th>平 均 点</th></tr><tr><td>地 球 工 学 科</td><td rowspan="2">前 期</td><td>1,000 点</td><td>723.08 点</td><td>523.40 点</td><td>581.50 点</td></tr><tr><td>建 築 学 科</td><td>1,000</td><td>775.90</td><td>551.80</td><td>604.57</td></tr><tr><td rowspan="2">物 理 工 学 科</td><td rowspan="2">前 期</td><td>(配 点 A)</td><td>1,000</td><td>704.11</td><td>559.70</td><td>610.41</td></tr><tr><td>(配 点 B)</td><td>1,000</td><td>825.33</td><td>698.66</td><td>729.30</td></tr><tr><td>電 気 電 子 工 学 科</td><td colspan="2" rowspan="3">前 期</td><td>1,000</td><td>814.00</td><td>547.53</td><td>603.44</td></tr><tr><td>情 報 学 科</td><td>1,000</td><td>728.55</td><td>526.40</td><td>594.74</td></tr><tr><td>工 業 化 学 科</td><td>1,000</td><td>743.08</td><td>540.58</td><td>595.32</td></tr></table>							工学部学科別	日 程	満 点	総 点			最 高 点	最 低 点	平 均 点	地 球 工 学 科	前 期	1,000 点	723.08 点	523.40 点	581.50 点	建 築 学 科	1,000	775.90	551.80	604.57	物 理 工 学 科	前 期	(配 点 A)	1,000	704.11	559.70	610.41	(配 点 B)	1,000	825.33	698.66	729.30	電 気 電 子 工 学 科	前 期		1,000	814.00	547.53	603.44	情 報 学 科	1,000	728.55	526.40	594.74	工 業 化 学 科	1,000	743.08	540.58	595.32
工学部学科別	日 程	満 点	総 点																																																				
			最 高 点	最 低 点	平 均 点																																																		
地 球 工 学 科	前 期	1,000 点	723.08 点	523.40 点	581.50 点																																																		
建 築 学 科		1,000	775.90	551.80	604.57																																																		
物 理 工 学 科	前 期	(配 点 A)	1,000	704.11	559.70	610.41																																																	
		(配 点 B)	1,000	825.33	698.66	729.30																																																	
電 気 電 子 工 学 科	前 期		1,000	814.00	547.53	603.44																																																	
情 報 学 科			1,000	728.55	526.40	594.74																																																	
工 業 化 学 科			1,000	743.08	540.58	595.32																																																	
農 学 部	前 期		1,050	837.58	620.23	673.36																																																	

注 1：最高点は合格者のうち総点が最も高い者の得点である。最低点は合格者のうち順位が最下位であった者の得点である。平均点は合格者の総点の平均点である。

注 2：合格者のうち個別学力検査の成績順位が「数学」と「理科」の得点合計を用いて定められる 30 位までの者の「数学」と「理科」の得点合計。

(備考) 1) 法学部・経済学部の外国学校出身者のための選考を除く。
2) 総点については、合格発表時のものである。

3. 志願者・入学者 出身高校等所在都道府県別調

上段…志願者数
下段…入学者数

都道府県	学 部										計
	総合 人間	文	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	
北海道	5 2	15 4	4 1	12 2	8 1	23 9	6 1	3 2	28 9	6 4	110 34
東北	青森	1	3	1	1		6 2	1		2 1	17 3
	岩手	1	4 2		1	2	2	1	1	3 1	16 3
	宮城	2 1	6 1		7 3	3 1	6 1	3	2	18 3	54 12
	秋田	1	3 2		2 1		1 1				7 4
	山形		5 2		2 1	1	3				11 3
	福島	4 2	4 1	1	2	1	7 2	2		1 4	26 5
	茨城	6 3	6 2	5 1	1 1	7 2	11 5	1	1	22 7	11 25
関東	栃木	1	3	2	2	2	5 3	1		15 3	2 7
	群馬	2	6 1	3	5 2	8 3	6 1	2	1	15 3	7 15
	埼玉	4	10 1	5 1	7 2	11 3	24 6	6 2		23 5	9 23
	千葉	10 4	14 3	5	14 3	19 3	17 6	4 3	2	27 6	8 31
	東京	48 7	62 10	20 3	44 5	67 12	72 20	25 5	8 2	61 21	42 102
	神奈川	15 3	17 4	8 1	14 2	27 6	26 4	6 1	4	34 14	19 40
	新潟	6 2	8 2		4	7 1	9 6	1	1	11 5	8 19
中部	富山	3 1	5 1		5 1	7 1	3 1	5 4	1	15 4	7 16
	石川	2	12 6	1 1	9 3	11 5	9 4	5 2	1	29 13	8 40
	福井	2	10 2	6 4	10 5	7 3	8 2	7 6	1	27 12	10 37
	山梨	3 1	2 2	2	1	1	5 2	2 1	1	6 3	2 14
	長野	9 2	6 2	1	6 1	7 1	15 8	6 1		20 2	6 20
	岐阜	16 4	19 10	1	18 6	11 5	20 7	9 6	6	62 17	11 40
	静岡	11 2	17 6	2 2	9 5	9 3	21 5	9 3	4	41 18	20 7
九州	愛知	37 12	52 17	18 3	43 15	41 17	71 29	24 7	15	142 68	55 21

都道府県	学 部										計
	総合 人間	文	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	
近畿	三重	14 2	21 4	8 2	8 4	15 5	20 12	12 7	4 2	40 24	10 3
	滋賀	10 3	12 5	6 1	12 4	14 3	29 9	15 3	8 1	74 28	21 10
	京都	59 9	74 26	22 6	121 52	95 30	68 24	62 22	22 6	277 105	87 22
	大阪	103 17	115 32	40 9	177 68	135 40	122 41	107 40	51 26	521 183	183 61
	兵庫	71 18	48 16	18 3	95 44	87 27	70 29	113 69	22 12	274 135	99 32
	奈良	24 5	42 16	8 3	70 31	77 30	35 15	57 25	12 2	230 105	71 30
	和歌山	2 2	14 3	7 2	14 5	13 7	9 5	11 3	3 2	60 24	19 6
中国	鳥取	2 2	2 2	2	9 7	1	1	4 1	1	8 1	6 5
	島根	4		2	2 1	5 2	2 2	7 4	2 1	12 6	4 3
	岡山	6 2	19 11	2	12 5	15 7	8 3	10 5	4 2	33 12	16 3
	広島	18 5	21 9	5 3	23 10	12 6	21 8	17 10	7 3	94 44	25 11
	山口	1	7 1	5 3	6 3	5 1	14 3	5 4	1	18 8	7 4
	徳島		3 1	3	9 3	3 1	5 3		1	18 7	4 1
	香川	5	4	3	17 6	2	12 2	8 2	5 2	31 8	8 3
四国	愛媛	8 1	10 2	3 2	12 5	5 1	14 6	11 5		23 8	8 1
	高知	4	3		5 3	3 1	5 2	5 2	3 2	11 3	5 1
	福岡	18 4	22 7	5 3	35 12	17 6	38 13	10 6	8 2	95 37	24 13
	佐賀	7 2	4 2	1	2 1		7 3	1 1		7 2	8 2
	長崎	5 1			3 2	2 1	7 1	5 3		11 6	4 2
	熊本	6	9 5	1	4 2	11 2	5 2	2 2	1	15 5	4 2
	大分	1	3 1	1	5 1	3 1	3 2	1 1	1	13 4	3 10
九州	宮崎	1 1	3 1		1 1	1 1	4 1	3 1	1	4 2	3 2
	鹿児島	6 2	6 1	3	5 1	8 1	12 4	7 3	1	14 2	10 4
	沖縄	5 1	2 1		2 1	3	6 1	1 1	1	7 2	1 1
合 計		569 121	733 226	230 62	868 330	789 239	887 316	600 259	211 83	2,492 973	875 316

(備考) 外国学校出身者のための選考を除く。
高等学校・中等教育学校出身者のみ各欄に含む。

4. 志願者・入学者 入学資格取得年別調

学 部	志 願 者			入 学 者		
	総 数	現 役 22. 3 卒	浪 人 21. 3 以前卒	総 数	現 役 22. 3 卒	浪 人 21. 3 以前卒
総 合 人 間 学 部	人 579 認 10	人 346 認 1 59.8%	人 233 認 9 40.2%	人 123 認 2	人 72 認 2 58.5%	人 51 認 2 41.5%
文 学 部	738 認 5	480 認 3 65.0%	258 認 2 35.0%	227 認 1	137 認 1 60.4%	90 認 1 39.6%
教 育 学 部	232 認 2	149 認 2 64.2%	83 認 2 35.8%	62	39 認 2 62.9%	23 認 2 37.1%
法 学 部	876 認 8	569 認 2 65.0%	307 認 6 35.0%	330	212 認 2 64.2%	118 認 2 35.8%
経 済 学 部	802 認 11 他 2	522 認 3 他 2 65.1%	280 認 8 他 2 34.9%	241 認 1 他 1	137 認 1 他 1 56.8%	104 認 1 他 1 43.2%
理 学 部	892 認 5	571 認 2 64.0%	321 認 3 36.0%	316	205 認 2 64.9%	111 認 2 35.1%
医 学 部 医 学 科	303 認 1 他 1	163 認 1 他 1 53.8%	140 認 1 他 1 46.2%	109	71 認 2 65.1%	38 認 2 34.9%
医 学 部 人間健康科学科	302 認 3	214 認 1 他 2 70.9%	88 認 2 他 2 29.1%	150	110 認 2 73.3%	40 認 2 26.7%
薬 学 部	213 認 2	143 認 1 他 1 67.1%	70 認 1 他 1 32.9%	83	56 認 2 67.5%	27 認 2 32.5%
工 学 部	2,507 認 14 他 1	1,654 認 7 他 7 66.0%	853 認 7 他 1 34.0%	974 認 1	627 認 1 64.4%	347 認 1 35.6%
農 学 部	876 認 1	586 認 1 他 1 66.9%	290 認 1 他 1 33.1%	316	184 認 2 58.2%	132 認 2 41.8%
合 計	8,320 認 62 他 4	5,397 認 21 他 3 64.9%	2,923 認 41 他 1 35.1%	2,931 認 5 他 1	1,850 認 2 他 1 63.1%	1,081 認 3 他 1 36.9%

〔外国学校出身者のための選考に係る入学資格取得年別調（外数）〕

学 部	志 願 者			入 学 者		
	総 数	現 役 21.4～22.3卒	浪 人 21. 3 以前卒	総 数	現 役 21.4～22.3卒	浪 人 21. 3 以前卒
法 学 部	人 29	人 27 93.1%	人 2 6.9%	人 6	人 6 100.0%	人 0 0.0%
経 済 学 部	28	22 78.6%	6 21.4%	7	6 85.7%	1 14.3%

(備考) 認…高等学校卒業程度認定試験合格者（大学入学資格検定合格者含む）

他…その他の入学資格取得者（高等学校・中等教育学校出身者、高等学校卒業程度認定試験合格者以外）

(学生部)

話題

FDのためのDVD教材「ティーチング・ティップス集」を開発

アナウンサーの話し方や伝え方のスキルを教員の授業力向上に役立てようと、情報学研究科の辻 高明特任助教らがNHK関連団体の協力を得て、FD (Faculty Development) のためのDVD教材「ティーチング・ティップス集」を開発した。

本教材は、「ポイントを際立たせる」、「黒板を上手に使う」、「スライドショーをわかりやすく進める」、「質問で学生に考えてもらう」など、講義において重要な12の項目から構成されている。本DVDでは、財団法人NHK放送研修センターのアナウンサーの1人が教員役で模擬授業を行い、もう1人がその問題点や工夫点を解説している。

情報学研究科では、本教材を約120名の教員に配付し、平成21年度のFD活動として活用した。今後、本教材を他部局の教員にも使っていただき、授業力向上に役立ててもらいたいと考えている。

また、視聴された方からは、次のような感想があった。

- ・中村佳正情報学研究科長「『ティーチング・ティップス集』の様々な反面教師役を演じるプロのアナウンサーの姿に、講義中の自分を容易に見つけることができた。見てはならないものを見たという後ろめたさの中で、誰からも教わることがないまま来てしまった自らの話し方を

密かに見直さざるを得なくなった」。

- ・辻本雅史教育学研究科長「技術的に的確なアドバイ스가、模擬授業を通して説明、解説されており、誰にでも役に立つ教材だと感心した。できるといいと分かっていたにもかかわらずやれない項目が多く、このモデルをもとに自分の講義を点検することができた」。

本DVDの配付を希望される方は、次の連絡先まで。

辻 高明(情報学研究科社会情報学専攻)

tsuji.takaaki.4v@kyoto-u.ac.jp



DVD教材「ティーチング・ティップス集」

(大学院情報学研究科)

堀江在マレーシア大使が霊長類研究所を視察

4月23日(金)、在マレーシア大使堀江正彦氏がマレーシアと学術研究上関係の深い霊長類研究所を視察された。

当日は、堀江大使とともに、マレーシア・オランウータン島財団のムスタファ・カマル氏ほか関係者が研究所を訪れ、松沢哲郎所長、伊谷原一野生動物研究センター長らと、同財団が推進中のオランウータンの保護、繁殖および研究開発プロジェクトについて意見交換がなされた。

意見交換の後、松沢所長の案内で研究所内のチンパンジー放飼場やリサーチ・リソース・ステーション(RRS)のニホンザル野外放飼場を見学された。

マレーシア・オランウータン島財団関係者にとっ

ては、プロジェクト推進のために大いに参考となり、将来的な展望を明確にできると熱心に見学され、併せて堀江大使よりプロジェクトの推進におけるさらなる支援要請があった。



堀江大使(前列左から二人目)ほか関係者集合写真

(霊長類研究所)

松本 紘総長が第4回中外学長会議に出席

松本 紘総長は、5月2日(日)～4日(火)の間、中国・南京市で開催された第4回中外学長会議に出席し、講演を行った。

本会議は中国教育部の主催により行われ、中国の大学長と中国国外からの招待大学長が講演やディスカッションを通して相互理解を進め、中国の高等教育発展に寄与することを目的としている。4回目となる今年は、香港・マカオを含む中国国外12ヶ国から26大学長と3社の企業関係者が参加し、中国国内からは国家重点建設大学、985プロジェクトおよび211プロジェクト対象大学等を中心に、200を超える大学が参加した。



会場の様子

会議はいくつかの大学長による講演とパネルディスカッションで構成され、イェール大学リチャード・レヴィン学長、清華大学顧 秉林学長をはじめとする大学長による各大学の事例紹介や中国の高等教育に対する提言があった他、マイクロソフト社のクレイグ・ムンディー氏が企業の視点から見た高等教育について話され、いずれも熱心な質問が寄せられた。パネルディスカッションでは、大学戦略やイノベーション、環境問題のセッションに分かれ、活発な議論が行われた。

松本総長は、最終日の講演で、国際化をイノベーションにつなげるという京都大学の取り組みを紹介した後、東アジアの漢字文化圏が持つ「共生」の精神の重要性に触れ、革新的なものに目が移りがちな高等教育の流れに一石を投じた。この意見は参加者から多くの賛同を得、日本からの唯一の参加校であった京都大学の存在感を示すものとなった。

また、今回の会議は中国の報道機関からも大きな注目を集めており、松本総長も取材を受けた他、講演内容についても中国国内で大きく報道された。



参加者記念撮影

(国際部)

中国・西安の京都大学同窓生と懇談会を開催

5月5日(水)に松本 紘総長一行が本学協定校の中国・西安交通大学を訪問した。翌6日(木)には、西安在住の本学同窓生の方々と懇談会を市内のホテルで行い、和やかな雰囲気の中、本学と西安交通大学等の協定校との交流状況や、6月末に西安で開催予定の京都大学国際シンポジウム等について、多岐にわたる話題で盛り上がった。

今回の懇談会は、2009年10月に発足した「京都大学中国校友会」のメンバーのうち、西安周辺に在住の方々が参加された。発足時には参加できなかったメンバーもあり、交流を深める上で貴重な機会となった。



同窓会参加者と松本総長

(国際部)

St. Gallen Symposiumは、毎年5月にスイスのSt. Gallenで開催され、世界各国の指導者や学生等が多く集い、グローバルな課題について議論する世界規模のシンポジウムです。今年は5月6日(木)から7日(金)にかけて開催され、本学からは大学院工学研究科機械理工学専攻修士課程の草間亮一さんが参加されました。草間さんから、この貴重な経験について、寄稿していただきましたので掲載します。

St. Gallen Symposium 参加報告

工学研究科機械理工学専攻修士課程2年

草間 亮一

St. Gallen Symposiumとは、世界中から約600名の産官学界のリーダーと、約200名の学生や若手起業家が一堂に会し、意見を交換できる貴重な機会である。今年で40回を数える本シンポジウムは、1月にスイスのダボスで開かれるWorld economic forumと比較して、St. Gallen大学の学生によって運営されていることから、学生版のダボス会議ともいわれている。

今年のテーマは“Entrepreneurs—agents of change”，アントレプレナーとは、リスクを恐れずにチャレンジし、新しい価値を創出することで社会に貢献する人のことを指す。アントレプレナーシップを育む環

境、アントレプレナーとして成功するために必要な要素などについて、大企業のCEOや政府高官、大学教授や起業家などの異なる立場から、活発に議論が交わされていた。

シンポジウムで印象的だった点はふたつある。ひとつは、鄧小平の「白猫であれ黒猫であれ、鼠を捕るのが良い猫である」という言葉を、中国以外の方が何度も口にされていたことだ。世界の目が中国・インドに向けられている現実において、日本のプレゼンスの低さと同時に、アジアでのチャンスの大きさを肌で感じた。もうひとつは、中国とアフリカの関係についてのワークセッションでの、アフリカから参加された方の「主語をアフリカにして議論をすべきだ」という発言だ。中国はアフリカから資源を搾取してばかりで問題である、という構図で議論するのではなく、アフリカを創っていくのは現地の彼ら彼女らであり、いかに「与えるか」ではなく、いか

に彼ら彼女らが「創り出せるか」に焦点を当てるのが大切なのだと考えさせられた。

何より、シンポジウムでの最大の収穫は、世界中の学生や若手企業家と話をする機会を得たことだ。彼ら彼女らと話をしているだけでも、プレゼンスの低さとは裏腹に、今の日本には、諸外国と対等に肩を並べることができる人材が揃っているように感じた。低い労働の流動性、英語力の欠如に対する危機感の低さ、新卒一斉採用の弊害が指摘される一方で、自分の知人を見渡してみると、現状に強い問題意識を持ち、実際に行動に移している人が多くいる。日本が世界に貢献する国であり続けるためには、学生であれ、大企業のサラリーマンであれ、起業家であれ、日本の将来をただ憂うのではなく、今いる場所において、何を為すべきなのかを自分の頭で考え、アントレプレナーたるべく行動を起こしていくことが必要なのだろう。

まず自分が行動してみることに。St. Gallen Symposiumは、その決意を新たにすることができたとても貴重な機会であった。



プリカンファレンスにて(右から3人目が草間さん)



ワークセッションの様子

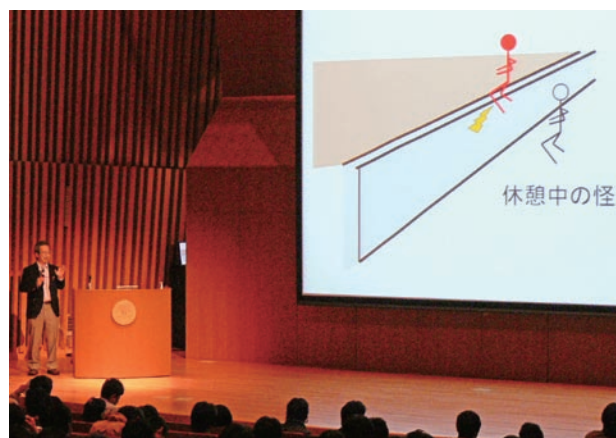
宇治キャンパスで平成22年度新入院生等のための安全衛生教育を開催

宇治キャンパスでは、5月10日(月)、今年度から宇治キャンパス内で実習・研究を実施する学部4回生、大学院生および新規配属の教職員等を対象に、「平成22年度新入院生等のための安全衛生教育」を開催した。

宇治地区部局長会議世話部局長である時任宣博化学研究所長の挨拶の後、宇治事業場総括安全衛生管理者の角 哲也防災研究所教授、宇治地区総合環境安全管理センター長の石川裕彦防災研究所教授ほか衛生委員会委員等により、化学物質の管理や廃棄物・排水の取扱いなど、宇治事業場の実態に即した安全衛生の講習が行われた。

実験等の際に発生する恐れのある事故や、それらを未然に防ぐための環境づくり、心構え等に関心が

寄せられ、学生210名、教職員75名、合計285名の参加者は熱心に耳を傾けた。



日々の行動の安全とリスクへの対応を説明する石川教授

(宇治地区事務部)

吉田泉殿作庭完工祝いの会を挙げる

平成19年6月に全面改修された吉田泉殿は、その庭が未整備のままであったが、川井秀一生存圏研究所教授を中心として、庭園改修の取り組みが始められた。平成20年の農学部造園実習Ⅰ(森本幸裕教授・今西純一助教担当)の中で吉田泉殿の造園設計が課題として取り上げられ、そこで選ばれた南 佐和彦氏(現農学研究科森林科学専攻M1)の基本設計が、平成21年5月開催の研究所長・センター長懇談会において説明され、さらに、枯山水(景の庭)にビオトープ(用の庭)の要素を加味した最終設計を要請し、同年7月に最終基本設計案が承認された。その後、実施設計図を作成するとともに、全学共通経費での支援等による実施財源を確保し、本年3月に水の京(みやこ)をテーマとした、ゆるやかで落ち着きを感じることができる新たな美しい庭園が完成した。

これを記念し、5月



枯山水(景の庭)



ビオトープ(用の庭)

11日(火)に吉田泉殿に松本 紘総長をお招きして祝いの会が挙行され、理事・副学長をはじめ研究所長・センター長など59名の参加があった。松本総長からの祝辞の後、設計から施工まで尽力いただいた南氏並びに施工業者の花豊造園株式会社に感謝状を贈呈した。さらに、設計者の南氏から本庭園設計のコンセプトについて説明があり、完成後の達成感などが披露されて、出席者の懇談の後、約1時間で閉会となった。

吉田泉殿の作庭完工を機に、全学共用の知の交流の場として、本施設の利用者がさらに増えることが期待される。



左から松本総長、設計者の南氏、施工業者の花豊造園(株) 森本氏
(数理解析研究所)

HEC Paris Executive MBA と「エグゼクティブ・イノベーション・ダイアログ2010」を開催

5月13日(木)、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(VBL)とHEC Paris Executive MBAは、VBLと京都大学周辺のホテルにおいて、「エグゼクティブ・イノベーション・ダイアログ2010」を開催した。

フランス・パリのHEC Paris Executive MBAから約40名のビジネス・エグゼクティブと、京都・大阪のビジネス・エグゼクティブ約15名が参加し、第1部は松重和美VBL施設長(工学研究科教授)による「京都大学VBL & Kyoto-Carプロジェクト」と題する特別講演、第2部は「日仏ビジネス・エグ

ゼクティブの新しい課題」というテーマでの意見交換が行われた。

第1部では、ベンチャー・ビジネスやビジネス・イノベーションにおけるテクノロジーとマネジメントの有機統合、Kyoto-Carテクノロジーと電源パワー・素材等についての専門的議論・質疑応答が活発に行われ、HEC Paris Executive MBAのビジネス・エグゼクティブは、Kyoto-Car: Bamgoolに強い関心を示された。

第2部では、松重施設長、中峯 敦常務執行役員

(株式会社堀場製作所), Eric Pernin 代表(HEC Paris Executive MBA)の挨拶に続き, ダイアログ・セッションが行われた。ラウンドテーブル別に, 新しいグローバル時代のイノベーション・テクノロジー, 起業家精神, ベンチャー・ビジネス, ビジネス・マネジメント, ビジネス・リーダー, グローバル人材, グローバル・マーケット, さらに日仏の現在の財政



特別講演を行う松重施設長

状況, 日仏ビジネス・コラボレーション, アジアの将来等新しい課題について, 参加ビジネス・エグゼクティブの優れた見識・豊かな経験から有意義な意見交換が行われた。

第1部, 第2部を踏まえ, 日仏ビジネス・エグゼクティブにとって, さらなるグローバル展開へのステージ開発の良い機会となった。



特別講演を聴く出席者

(ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー)

松本 紘総長が東アジア研究型大学協会(AEARU)第26回理事会に出席

5月14日(金), 大阪大学(大阪府吹田市)において, 東アジア研究型大学協会(AEARU)第26回理事会が開催された。AEARUは東アジア地域(中国, 台湾, 韓国, 香港, 日本)における17の研究型大学で構成される大学連合であり, 本学はAEARUの加盟大学間の学術交流に積極的な役割を果たしている。

理事会には, 6大学から理事等20名が参加した。本学からは, 松本 紘総長, 小寺秀俊総長室長, 森 純一国際交流推進機構長, 戸倉照雄国際部長等が参加し, 2009年に実施した事業のレビューや今後の活動予定について活発な討議が行われた。また, 今後の活動として,



理事会で発言する松本総長

田中克己情報学研究科副研究科長より, 2011年1月17, 18日に開催予定の“The 9th AEARU Web Technology and Computer Science Workshop”について, 概要の説明があった。



理事会参加大学代表集合写真

(国際部)

グローバル COE プログラム紹介



京都大学グローバルCOEプログラム

心が活きる教育のための国際的拠点

プログラム名称：心が活きる教育のための国際的拠点

拠点リーダー：教育学研究科教授 子安 増生

申請分野：人文科学 **研究分野：**心理学・教育学

申請部局：教育学研究科，文学研究科，人間・環境学研究科，高等教育
研究開発推進センター，こころの未来研究センター

1. はじめに

本拠点は、平成19年度に京都大学のグローバルCOE(人文科学)として採択され、現在5年計画の4年目を迎えています。左上のロゴマークは、著名グラフィックデザイナーにして本学学術情報メディアセンター客員教授の奥村昭夫先生の手になるものであり、拠点のテーマである「有能感・達成感・生命感が合わさって幸福感(心が活きる状態)が生まれる」という様子を、3つの色が重なり合う中心に白い空間が生まれることで表現しています。拠点のホームページ(<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/>)には、そのアニメーションも用意しています。ホームページには、私どもの活動の詳細を公開していますが、ここではその中心的な部分をかいつまんでご説明します。

2. 拠点形成の目的

幸福は、学術活動を含む人間のあらゆる営みの目標でなければなりません。現実の世界は幸福の達成からは程遠いと言わざるを得ません。教育という営みを、ここでは学校教育よりも広いものと捉えています。人間の幸福の達成に役立てるにはどうしたらよいのでしょうか。

たとえば、最近、フィンランドの教育の素晴らしさが頻繁に取り上げられています。OECDが世界41カ国の15歳生徒を対象に実施したPISA調査において、フィンランドは数学・科学・読解力・問題解決のすべてでトップクラスの成績でした。この成果は、教師の質が高く、平等と機会均等が重んじられ、生徒が自ら考え学ぶことを基本とする教育制度に負うところが大きいと伝えられています。ところが、これほど素晴らしい教育体制のもとでも、学校をめぐる事件からは免れることができません。2007年11月にヘルシンキ郊外の中学校で死者14人を出す銃乱射事件があり、2008年9月にはヘルシンキ郊外の職業訓練学校で死者11人を出す銃乱射事件が続きました。教育が人を幸せにするにはどうすればよいのでしょうか。

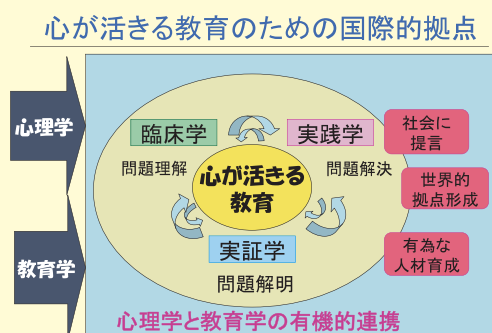


図1 拠点がカバーする分野

京都大学の心理学系教員と教育学系教員が有機的に連携し、問題の解明を目指す「実証学」、問題の理解を深める「臨床学」、問題の解決を実行する「実践学」という3つの知の分野から「心が活きる教育」のあり方を探ることが本拠点の目的です(図1)。

3. 拠点の構成

本拠点では、出発点に図2のような仮説を立てました。

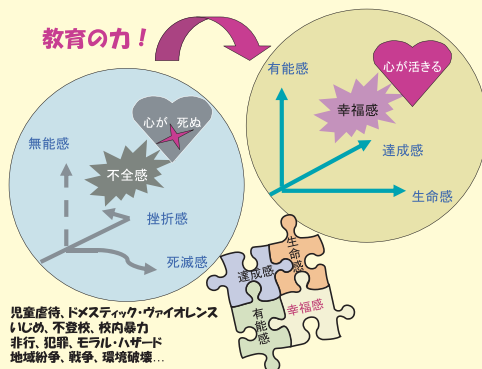


図2 心が活きる教育

人間は、教育というものを通じ、知識と技能を獲得することによって「有能感」を得、自然や社会とつながることによってこの世界に生きているという「生命感」を得ます。この2つを一定の目標に向け十分に発揮することによって、何かをなしえたという「達成感」が得られ、そこに「幸福感」も感じることができます。反対に、このリンクの一部

あるいは全部がうまく機能しないとき、様々な問題が起こってきます。では、教育はどのようにして不全感を幸福感に転ずることができるのでしょうか。そのことを、次の4つの研究ユニットを中心に研究しています(図3)。

- A. 基礎過程：「心が活きる」とはどういうことか、逆に「心が生きていない」状態とはどのようなものか、その基礎過程について研究しています。
- B. システム：「心が活きる」ために必要な社会の制度設計と、それを社会に説明し、実際に運用するシステムについて研究を行っています。
- C. サポート：「心が活きる」ために有効な心理的サポートや教育的かかわりについて、臨床的アプローチなどによる研究と実践を行っています。
- D. 「心が活きる教育」のあり方を評価する尺度の包括的検討を行うと共に、欧米やアジアの国々で「幸福感の国際比較調査」を実施しています。

4. 国際的拠点形成と情報発信

国際拠点ネットワーク形成活動として、京都大学を世界中の心理学・教育学の研究者が研究の発展を求めて集まる拠点とすべく、米ミシガン大学、

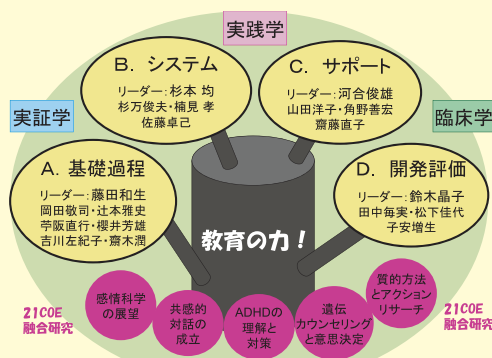


図3 拠点の実施体制のイメージ図



図4 世界の学術交流協定機関等との連携の進捗

英ランカスター大学，中国中央教育科学研究所，北京師範大学，独ベルリン自由大学，英ロンドン大学教育研究所などの世界的研究機関との学術交流協定に基づく教育・研究活動をさらに活発に展開し，国内外の優れた研究者の雇用・招聘，若手研究者の派遣・招聘，諸外国への積極的な情報発信を行っています(図4)。

5. 人材育成プログラム

グローバルCOEの重要な柱である有為な人材の育成については，図5・図6のようなプログラムを用意しています。

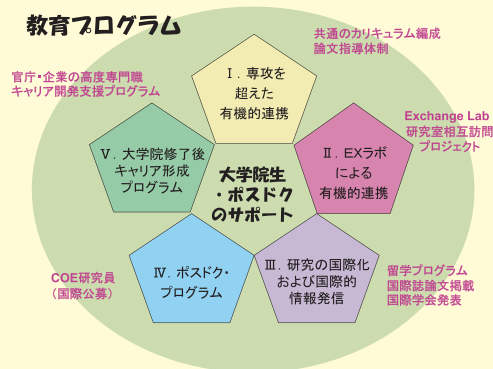


図5 教育実施計画

若手支援プログラム

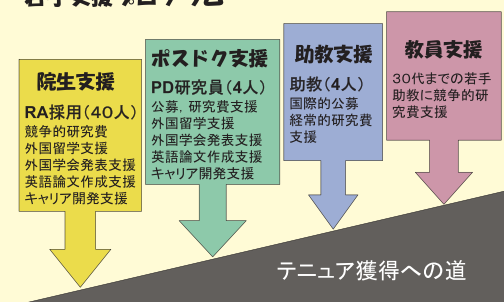


図6 若手支援プログラム

- I. 専攻や課程の壁を越えて幅広い視野を持つ研究者を養成するために，カリキュラム編成と論文指導体制の整備を拠点全体で行っています。
- II. 大学院生が研究室相互訪問に参画する“Exchanging Laboratory Program”(EX

ラボ)を毎年9月頃に実施しています。

- III. 世界的研究機関との学術交流協定に基づく留学を支援し，国際学術誌投稿と国際学会発表をサポートしています。外国人講師が実施する外国語による授業科目「国際教育研究フロンティア」も毎年複数科目を開講しています。
- IV. ポストドク研究員(4人)，助教(4人)を公募により採用しました。助教の1人は国際公募を行い，ドイツ人研究者を採用しました。
- V. 大学などの研究機関だけでなく，官庁・企業の心理学・教育学関連職や，シンクタンク，各種医療関連職に就職できるよう啓発しています。

また，20歳代～30歳代の助教を対象とする「若手教員支援研究費」，博士課程大学院生対象の「海外留学資金」，「大学院養成プログラム研究費」，「研究開発コロキウム」経費を毎年公募し助成しています。

6. これまでの活動の成果

毎年報告書を刊行するほか，外部評価(平成20年度)および中間評価(平成21年度)を受けました。グローバルCOEプログラム委員会による中間評価(平成21年11月)においては，「現行の努力を継続することによって，当初目的を達成することが可能と判断される」という高い評価を受けることができました。また，ユニットが連携して行う研究成果公開のひとつの姿として，『心が活きる教育に向かって－幸福感を紡ぐ心理学・教育学』(ナカニシヤ出版)を編集し，2009年6月に刊行しました。

あと2年足らず，所期の目標に向かって邁進する所存です。

(教育学研究科教授 子安 増生)